



# K.C.News

京都知福協だより

京都知的障害者福祉施設協議会

京都市中京区竹屋町通烏丸東入ル清水町375番地 府立総合社会福祉会館5階 京都府社会福祉協議会

発行人 森 昇



信愛育成苑「クワガタ」

- ◆2012年度の基本方針 ————— 1
- ◆事務局移転と法人化について ————— 2
- ◆クラシックコンサートを終えて ————— 2~3
- ◆平成23年度近畿地区グループホーム・ケアホーム研修会に参加して — 3
- ◆シリーズこんにちは ————— 4
- ◆シリーズがんばっています ————— 5
- ◆広報部員研修旅行報告 ————— 6
- ◆卓球バレー大会報告 ————— 7
- ◆シリーズこんなことやっています ————— 8
- ◆編集後記 ————— 8

## 2012年度の基本方針

京都知的障害者福祉施設協議会

会長 森 昇



会員の皆様には、本会の事業運営にご支援ご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。さて、2011年は千年

なりません。  
そのような社会情勢の中で、京都知福協も2012年度より事務局を独自で設置するという、本会始まって以来の大きな節目の時を迎えました。

周期ともいわれる大地震により東日本一帯で大規模な災害が発生し、福島第二原子力発電所の事故による放射能汚染が拡大するなど、世界に例を見ない途方もなく困難な福祉課題を抱えることになりました。

そこで、本会では「事務局移転・法人化検討委員会」を設置し、昨年7月より6回にわたり検討を重ね、12月の施設長会議での協議を経て去る2月22日に臨時総会を開催し、事務局移転も含めた基本方針を次のとおり決定しました。

一方、2010年1月より開始された障害者制度改革について、2011年8月に障がい者制

① 本年4月に本会事務局を京都社会福祉会館内に設置する。  
② 事務局運営経費の確保のため、会員の加入促進を図り、会費規程の見直しを行う。

度改革推進会議総合福祉部会が、障害者総合福祉法の骨格提言をとりまとめ、いよいよ障害者権利条約に合致する新たな法制度の整備が

③ 新事業体系との整合性を図り、新たな課題やニーズに対応するため組織体制を見直す。  
④ 新たな課題やニーズに対応するため研修事業の充実などに取り組みとともに、法人化の検討を継続する。

始まるかと期待されましたが、去る2月8日に厚生労働省は総合福祉部会に対し、障害者自立支援法の一部を修正して新たな法律とみなし、今国会に改正案を提案して来年4月の施行を目指す旨を述べました。

なお、この総会で次期役員を選任も行われ、会長に「かしのき」の矢野施設長が選任され役員体制も確定しました。

この説明に対し、関係者や関係団体から、「法を廃止し障害者の意見を踏まえた新法をつくる」という基本合意の根幹に反するものであつて、明らかな約束違反である」との強い非難の声が上がつており、今後の行方を注視していかなば

ただきました皆様深く感謝いたしますとにも、今後は矢野会長の力強いリーダーシップの下に全会員が一致団結し、共に役割を担い、新たな時代に相応しい組織に成長することができるよう、皆様の二層のご協力をお願いし、会長退任のご挨拶といたします。

# 事務局移転と法人化について

事務局移転・法人化検討委員会 委員長

ベテスタの家 中西昌哉

去る2月22日、本会総会にて、「事務局移転設置と組織の見直しについて」の審議がなされ議決されましたのでご報告をいたします。

京都知福協は、2001年度より事務局を京都府社会福祉協議会に委託してまいりましたが、その契約期間は2012年3月末をもつて終了することになっていました。そこで今後のあり方を考える必要から今年度はこの検討が続けられてきたのであります。2011年5月に開催された総会では、事務局移転と法人化への検討委員会が設置されることになりました。委員会では6回の議論を重ね、12月に開催された施設長会議にて検討結果報告をしてきたところであります。

そして今次総会では、これまでの流れを踏まえた提案がなされました。  
一、事務局の移転設置と法人化の検討について  
事務局を本年4月に次に移転させる。  
移転先：京都社会福祉会館2階202号室  
京都市上京区堀川通り丸太町下ル(二条城北側)

なお、法人化については引き続き特別委員会を設置して法人化についての検討を進める。

## 二、会費の改定

事務所の設置経費の増加に伴い、収入の確保を図る必要があることから会員の加入を促進するとともに、本会会費を次のとおり改定する。

- （一）生活支援施設、通所施設の会費  
定員割(550円×定員数)
- （変更前）基本額20000円+
- （変更後）基本額30000円+

- （二）グループホームケアホーム、就労生活支援センター、居宅介護事業等の会費  
（変更前）当面徴収しない  
（変更後）一指定事業所あたり10000円

## 三、組織の見直し

- 1. 役員 副会長を3名から4名にする。
- 2. 委員会  
（変更前）予算対策委員会  
調査研究委員会 研修委員会  
政策委員会

（変更後）政策委員会 研修委員会  
人権・倫理委員会とする。

## 3. 事業部会

- （変更前）行事部会 広報部会  
福利厚生部会 文化部会
- （変更後）行事・文化部会 広報部会

- 4. 種別部会 障害者自立支援法に基づく新体系への移行に伴い、種別部会の見直しを日本知福協の変更に準じて行う。  
現行の分科会は廃止する。
- （変更後）発達支援部会  
施設入所支援部会 日中活動支援部会  
生産活動・就労支援部会  
地域支援部会 相談支援部会の6部会

今回の決定事項により、会員施設・事業所の会費改定が行われることとなりましたが、皆様からの賛同を得ることができ、会長をはじめ役員一同、感謝申し上げます。また大幅な組織改編も成されます。今後の活動がより一層充実したものとなるよう励まなくてはなりません。当面は事務局の移転による諸手続きでご迷惑をお掛けするかも知れませんが、何卒御理解を賜りましたら幸いです。

2012年度は新役員体制の下で歩み出しますが、新事務局体制共々よろしくお願いたします。

# クラシックコンサートを終えて

平成23年度文化部会

知福協文化部会 谷村敏幸



平成24年2月15日(水)京都公会館第一ホールにて、京都障害児者親の会協議会、京都知的障害者福祉施設協議会共同開催により「第21回クラシックコンサート」を開催しました。今年、京都公会館の改修工事の為に代替の会場が見つからない為、3年間休止することになり節目のコンサートになりました。毎年コンサートを開催するに当たり多くの課題を抱えながら運営してきました。ひとつは運営費の問題です。毎年お世話になってます京都新聞社会福祉事業団さんが公益法人化に伴い助成金

# 第7回近畿地区グループホーム・ケアホーム研修会に参加して

社会福祉法人乙訓福祉会 田中幸子

平成24年2月11日第7回近畿地区グループホーム・ケアホーム研修会が長岡京市総合交流センターにて120名を超える参加者の下、開催されました。メインテーマは「聞く、利用者の声を」。基調講演ではメインストリーム協会副代表の玉木幸則さんに、障害当事者の「想い」に焦点を当てた講演をいただきました。

玉木さんご自身は「当事者」として、また「支援者」としての立場を踏まえた上で、「人として生きることとは？」と大きな問いかけを通して、日々の振り返りによる「気づき」の大切さを教えていただきました。

また、現在就いている仕事は誰のため、何のためなのかを考えると、誰かのためでなく、私たちが私たちとして生きるためだということを確認できました。

では、私たちは利用者からどのような支援が求められているのでしょうか。まず第一に、支援に携わる時には、その利用者がどういふ社会環境の中で生活してきたのか、また、利用者の価値感を理解した上で、はじめに支援が可能となるということ。その利用者の価値感を認めて支援者はプロとしてその思いを受け止めるその姿勢が問われています。次に、今回の講演のテーマである「聞いて下さい、私たちの声」に対して私たち支援者サイドは「聞いてますよ」という思いがあります。でも実際には、利用者は本

当に本音で支援者と関わることができているのか、支援者の顔色を伺いながら無難に済ませようと気遣いさせてしまっていないか、常に疑問を感じる意識が大切であると思えます。

講演の中で玉木さんが、当事者にインタビューされました。一人は和歌山県の由良フラワーホームに18年前より入居されている福本琢也さん。午前中は就労され、いつも笑顔で明るく生きていきたいことが今の希望だそうです。二人目は奈良県のグループホームもみのきに1年前より入居されている橋元一貴さん。日中は就労されていて、今後は一人暮らしの夢実現に向けて生活を充実させ、仕事も更に頑張りたいと希望されています。インタビュールされる玉木さんの姿勢から、私は、日々の支援の中で本当に利用者の話を丁寧に聴き、受け止めているかという反省点が浮かんできました。

また、社会情勢や制度が変化する中で利用者個々の生活課題も多様化してきています。地域社会との関わりや各種社会資源との繋がりが、ネットワークの構築が支援の質の向上には大切であることに共感しました。その基盤の上で、利用者本人が自分らしく生きてきた歴史を理解した上で、その人ができること、支援者ができること、行政ができること、このできることを重ねていくことが重要であると感じました。地域の中でいきいきと暮らしていける社会、いわゆるインクルージョンを目指される玉木さんの思いの

心底には、人間同士の信頼関係があつてこそ支援も成り立っていくという思いが強く伝わってきました。

最後に、実践報告4件でも共通して言えることは、人と人との繋がりが大切であること、利用者本人の「想い」を聞き、成り立つような支援の在り方が大切であること、以上のことを大切にしながら支援させて頂こうと思いました。



福本琢也さん(左) 橋元一貴さん(右)



玉木幸則氏

事業の見直しをされ、助成金が削減されました。また、当日スタッフの確保の問題があります。毎回多くのスタッフを必要としますが、それぞれの施設での引率に手がかりスタッフとして派遣できない施設が多くあるのが現状です。

知福協には、3つの部会が在り、加盟施設は必ずどこかに所属することになっていますが、現実組織機能が果たされていない状態です。これからは、文化部会だけの運営は厳しく京都知福協の協力体制の下でスタッフを集めないといけないと思います。昨年度から、新たな取組として京都ワイズメンズクラブの皆さんより、運営協力としてスタッフの派遣と協力をいただきました。今後の大きな力になると思います。しかし、一方では本来の施設間協力で運営をして行くべきと思いますが、なかなかできないのが現実であります。

運営上の課題は沢山ありますが、毎年1400人も多くの利用者さんが参加され、素晴らしい笑顔を見せて頂いており、クラシックコンサートを今後も続けて欲しいと思います。今後3年間休止しますが、この時期に京都知福協が二度組織全体で取り組んでいけるよう検討を望みます。最後になりましたが、今年も多くの方の協力で無事にコンサートが開催出来ました事感謝します。

# シリーズこんにちは 広報部員施設訪問記 社会福祉法人 鳩ヶ峰福祉会 やわた作業所

訪問者：能政夕記 (HOLYLAND)



▲利用者の方の作品

事業所外観

京都府八幡市。日本三八大幡宮の二つ石清水八幡宮の参拝客で賑わう場所を通り過ぎ、男山を道なりに少し走った所にやわた作業所がありました。初めて訪問する場所だったので迷わずにたどり着けるか不安でしたが、「やわた味弁当」とイベントされた車両を施設の前で見つけ、無事にたどり着くことができました。施設に着くと施設長の沼田さんが出迎えて下さいました。パンフレットや数年前に始められた配食サービス事業のリーフレットをいただき、やわた作業所の現状についてお話を伺いました。

やわた作業所は生活介護事業と就労継続B型事業を運営する多機能型事業所で、現在51名の方が利用されています。51名の内5名の利用者の方は施設外就労として別の場所で、京都生活協同組合の物流の作業に携わっており、意欲的に取り組んでおられるそうです。やわた作業所の中には、どりー夢班、びーす班、すまいる班の3つの作業班があり、利用者の方の障害の程度に合わせて作業をされているとのことでした。やわた作業所の現状を教えてくださいました。

最初に訪れたのは、どりー夢班が働く厨房。厨房の扉を開けると、食欲をそそられる美味しいご飯の香りがしていました。

厨房では数年前に始められた配食サービス「やわた味弁当」の準備をされていました。利用者の方は食材を弁当箱に詰める、返却された弁当箱を洗う、領収書の発行、配達などの作業に取り組んでおられ、出来上がったお弁当は八幡市役所や社会福祉協議会など地域の公共施設や民間の事業所などに配達されることでした。お弁当は二日に平均して、1000~1200食程度作られ、多い日は150食を超えるとのことでした。中高年の方をターゲットにしておられ、食材は国産を中心とした野菜や米を使用しておられ、厨房は掲示内容となっていたヶ月分のメニュー表はバランスの良い食事内容となっていました。多くの人に「やわた味弁当」を口にしていただくために定期的にお客さまに対してアンケートを行い、その結果を参考にメニュー作りやサービス内容を試行錯誤されているとのことでした。今後は宣伝用のリーフレットを新しく改良したり、配達用のユニフォームを作る事を検討しておられ、「やわた味弁当」のさらなる発展を目指して日々奮闘しておられました。

厨房を出て、真っ直ぐ進んだ先にある作業場では、10数名の利用者の方が箱折りの作業に取り組んでおられました。どりー夢班には18名の利用者の方がおられ、配食サービスの仕事をするとさしこぶきさんなどの自主製品作りや下請け作業をする人にと大きく役割を分けているとのことでした。また、どりー夢班の利用者の方は作業意欲が高く、給料のことを意識して作業に取り組んでおられるとのこと。こちらの作業場では利用者の方が二つずつ丁寧に箱を折っては積み上げ、黙々と作業を進めておられました。作業場の中央では利用者の方と地域のボランティアの方とで京野菜のデザインがしゅゆうされたさしこぶきさんのアイロンがけをされていました。職員の方に話を伺うと地域には約30名ほどのボランティアの方がおられ、定期的にさしこぶきさんの作業を手伝いに来られているとのこと。作業を通して地域の方と積極的に関わっておられました。

どりー夢班の作業場を通り抜け、二つ廊下を渡った先にはびーす班の作業場がありました。どりー夢班とは異なる種類の箱折りの作業に取り組んでおられる箱に折り目をつける人、箱を組み立てる人など利用者の方、1人1人の力やペースに合わせて作業工程が分けられていました。作業場の雰囲気は、1日のスケジュールや絵画、今年の日標などが飾ってあり、明るい空間となっていました。びーす班は楽しく作業に取り組みながら仕事に向き合う力や人とのやり取りを豊かにすることに重点を置いておられ、箱折りの作業の他には地域に出向き、古紙やアルミ缶の回収も行っておられました。また、余暇活動の環として、創作活動にも力を入れておられ、数年前には施設の近くにある「やわた流れ橋交流プラザ」にて利用者の方の作品が



花作業



びーす班の作業の様子

展示されたそうです。作業場には、大きな木のちぎり絵が飾られてあり、その作品も出展された1枚とのことでした。その他にも素敵な絵がたくさん飾られてあり、作品を観ていると心が和みました。

びーす班の作業場を出て、すぐ横にある階段を降りた先にはすまいる班の作業場がありました。すまいる班では作業をする事を一番の目的にするのではなく、様々な活動を通して社会性や生活力を身につけていくことをねらいとし、作業以外にも散歩やプールなどの活動に励んでおられるとのことでした。「こんにちは」と挨拶をするとか大きな声で返事をしてくださる方が多く、とてもエネルギーな作業班でした。作業はびーす班と同じ箱折りの作業に取り組んでおられ、職員の方の声かけの元、ゆっくりと二つずつ箱を組み立てておられました。また、地域の公共施設のプラントの花の植え替えも行っておられるとのこと。作業場の外では利用者の方がブルーシートの上に土を置き、スコップで土を混ぜ合わせておられました。

3班の作業の様子を見学させていただいた後、玄関前にあらが販売されているのが目に入り興味を注がれました。沼田さんに作り方などをお聞きすると、利用者のご家族の方の指導を受け、餅をつく所からラッピングまでの全工程を手作りで行っているとのことでした。そのため、出来あがるまでに数ヶ月の時間がかかるという話を伺い、あらが作りの大変さを学びました。お味はほんのりとした醤油味が優しい味のするあらがでした。

やわた作業所の皆様とお別れの挨拶をした後、いただいた施設案内のパンフレットを見ながら、施設長の沼田さんの話を振り返り、今の福祉施設の現状や自分の仕事のあり方などについて考えさせられました。やわた作業所のパンフレットには「アットホームな施設づくりと地域の人々から信頼される施設づくりを、大切にしています。」と記載されており、その言葉通り、作業を通して地域の方とのつながりを持つよう積極的に活動をされており、アットホームという言葉の通りの施設だと思いました。

一方で、やわた作業所が抱える課題は利用者やご家



配食作業

族の方の高齢化と共に個別支援が必要な方も増え、その体制や場の確保に悩んでおられることでした。時代の流れと共に施設事業の拡大やサービスの質の向上など求められる「ニーズも多くなり、自分はこのような支援がしたい」と思っても限られた資源の中で行うには理想が叶わない時があり、もどかしい気持ちになることがあります。そんな時でも与えられた空間と費用、人材だけで課題を達成しなければならぬところがあり、やわた作業所と同じような課題を抱えておられる施設は多いのではないかと思います。

しかし、そのような会話の中でも施設長の沼田さんのお話がとても印象的でした。

「時代の流れや利用者の家庭の状況の変化と共に支援を変えて行かなければならないことも多いし、新しく挑戦しなければならぬことある。だけど、変わらないものもあつて、利用者の方にはやわた作業所で過ごして行く中で、『自分の居場所』を見つけて、自分らしく生き生きと過ごして欲しい。そんな利用者の方の願いに添った支援をしていきたい。家族の方の将来の不安にも応えられる施設づくりをしていきたい。」と。

訪問中、施設長の沼田さんをはじめ、利用者、職員、ボランティアの方々、作業所におられるほとんどの方が「笑顔」でした。短時間の訪問ではありましたが、利用者の方の多くがやわた作業所での生活を通して自分の居場所を見つけておられるのだらうと思つたと同時に、福祉の現状が時代と共に変わつても利用者の方に対する想いは変わらないということをやわた作業所での見学を通して学ぶことができました。

今回はお忙しい中、やわた作業所の皆様には取材にご協力いただき、本当にありがとうございました。

シリーズがんばっています

# 社会福祉法人イエス団 空の鳥幼児園

園長 平田 義



▲バス内は楽しそうな笑い声があふれています



▲光るマーカーでのお絵かきは、手元に大注目です。



▲みんなで、よーいどん!!



▲お友だちと力を合わせてあげたパラバルーン!



▲お友だちと一緒に積み木あそび!たのしいな～

空の鳥幼児園は、1978年4月1日、京都市から委託され、京都市伏見区の向島ニュータウン内に設立されました。併設されている野の百合保育園、愛隣館研修センター(重症心身障がい者通所事業B型「シサム」、愛隣デン「イサービスセンター」、ホームヘルプ事業「ゆうりん」、京都市南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」が併設)と共に「愛隣館」と総称されています。地域に根付き、地域の人々に愛される施設でありたいと考えています。

京都市内に4つある知的障がい児単独通園施設の1つで、2歳から就学前までの子どもさんが現在43名(定員30名)、毎日元氣いっぱいに通って来られます。現在は伏見区と山科区の方が見えます。現在は伏見区と山科区の方が見えます。現在は伏見区と山科区の方が見えます。

一人ひとりの子どもさんの生活ベースを大切に過ごす小集団グループと、併設されている野の百合保育園に生活の基盤を移して過ごし、互いの園の子どものつながりや育ちあうことを大切にしたいと考えています。

一人ひとりの子どもさんの生活ベースを大切に過ごす小集団グループと、併設されている野の百合保育園に生活の基盤を移して過ごし、互いの園の子どものつながりや育ちあうことを大切にしたいと考えています。

一人ひとりの子どもさんの生活ベースを大切に過ごす小集団グループと、併設されている野の百合保育園に生活の基盤を移して過ごし、互いの園の子どものつながりや育ちあうことを大切にしたいと考えています。

バスに乗り込んでいたり、にっこり笑顔でおはようのご挨拶をしてくれます。またバス内では子どもたちが大好きな歌の大合唱や、「あれは何?」「見て見ろ!大きいトラックが通ったよ!」と発見がいっぱいで、とても賑やかにドライブを楽しんでいます。園に到着すると、待つてましたとばかりに足早にお部屋に向かう子どもさんや、職員に抱っこされてほっと体をリラックスさせ微笑み返してくれる子どもさんと、これから始まる一日に期待いっっぱいの表情を見せてくれます。

発達に遅れがある子どもさん、知的障がいと身体障がいをおわせ持つ子どもさん、医療的ケアが必要な子どもさん、一人ひとり様々な特性を持っている子どもたちが活き活きと活動でき、その子どもさんらしい発達が成し遂げられるように、「一人ひとりを大切に」という基本理念のもと日々療育を行っています。

障がいの有無に関わらず、子どもたちが共に過ごしあう中でお互いの事を知っていく、子どもさん同士が気持ちを通わせ合う姿に、職員は驚かされたり、気付かされることがたくさんあります。表情や身体の動きで気持ちを伝える子どもさんと、その思いや表現を受け止める子どもさん…。言葉だけでなくコミュニケーションが自然に子どもたち同士の中でみつけられ深まっていく様子は、子ども同士だからこそ経験できることであり、子どもたちの感性の素晴らしさを感じます。障がいの有無に関わらず、子どもたち一人ひとりの好きなこと、興味、感じ方などの違いや、個性を認め合うことを大切にしたいんだよ!」ほくもわたしも、お友だちも、一人ひとりが大切な存在なんだよ!」そのことを一人ひとりの子どもさん自身が感じられるような統合保育を目指していきたいと思っています。

# 広報部員研修旅行報告

## 障がい者通所授産施設 あすなる

執筆者：天野真弓 (ひなどり学園)  
酒井紀江 (るりけい寮)



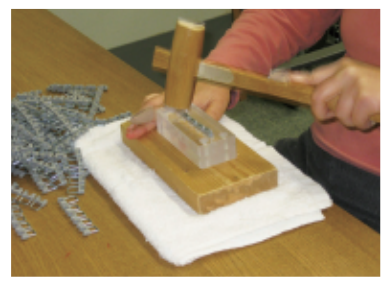
▲製麺班



▲製麺班



▲印刷班



▲軽作業班(ステッpler作業)



大阪府豊中市にある、社会福祉法人豊中愛和会が運営する障がい者通所授産施設「あすなる」を広報部員の9名にて訪問させていただきました。新しく立派な建物で、閑静な住宅地に隣接した環境の中にありました。

豊中愛和会は2002(平成14)年1月に設立され、「あすなる」は2003(平成15)年4月に障がい者施設として開設されました。授産施設として、生活介護事業、短期入所事業、日中一時支援事業などを運営されています。

当日はお忙しい中、施設長の迎さんにお話を伺い、施設を案内していただきました。授産施設では、製麺班、印刷班、清掃班、軽作業1班、2班、洗車班の5つの作業班が設けられています。現在、66名の方が利用されています。

丁度、訪問させていただいた時に、食堂の床を綺麗に拭き掃除されている清掃班の方がいらつしました。食堂以外に施設内の廊下やトイレなどを掃除する作業が行われています。

印刷班では、パソコンを使って名

刺やカレンダーの製作、チラシや封筒の印刷作業が行われています。伺った時には、利用者さんがパソコンに向かい注文を受けた名刺やチラシのデザインの製作をされていた。そして、毎年オリジナルカレンダーも製作されており、利用者さんが描いた絵をカレンダーにして販売されています。予定など書き込めるようにしたり、月毎に綺麗に切り離せるようにと紙に切り込みを入れたり、使用される消費者の方の声を大切にして、改良される事もあるようで、細かな心配りがなされています。

軽作業1班ではステップル(コの字型をしたクッション付きの電線配線用留釘)の作製や箱詰め、枕カバーを畳む作業が行われ、2班ではお菓子の箱折り作業が行われています。この軽作業班が一番人数の多い作業班になりますが、部屋が2つに仕切られ、利用者の方によっては作業に集中できるように囲いがされていたりと配慮されています。

洗車班では、ご都合により拝見することは出来ませんでした。が、

公用車や職員さんの車を洗車する作業が行われているそうです。

製麺班では、拝見させていただいた時には利用者の方10名、職員のうち1名で作業されていました。こちらでは「あすなる麺」と名づけたうどんを作られています。生麺と日持ちのする半生麺の2種類を作られており、原材料のひとつひとつにこだわりを持たれ、衛生面にも十分に配慮されていました。マスクと帽子・手袋を装着して手洗いや消毒をし、製麺室内にて製造過程を見学させていただきました。

製麺室には粉を混ぜる機械、生地を伸ばす機械、乾燥室など麺を作るための機械が完備されており、皆さん厳重にマスクと帽子、手袋、清潔感のある真っ白い作業服に身を包まれました。皆さん、目しか見えませんが、そこからでも皆さんの生き生きとした表情が伺え、作業も自信を持ってされているなど感じました。長さの異なるうどんをハサミで丁寧に切り揃えておられる方、うどんを量つておられる方、袋詰めされている方、それを箱に詰めておられる方等、慣れ

た手つきで作業に取り組んでおられました。残った切れ端は、ミルサー食として提供され、無駄にはされていません。

「あすなる麺」は豊中市内のイベント時やバザー、郵便局、インターネット等で販売されています。販売には利用者の方も自主的に参加されているそうです。また、地域でも評判となっており、食のオリンピックと言われている国際コンテストのモンドセレクションで、金賞受賞もされています。それ以来、テレビやラジオ、新聞等からの取材もあり、全国各地からの注文や企業での販売のお話も来ているそうです。製麺の仕事に慣れるまでに最低3ヶ月、また半年かかる方もおられたそうで、現在の「あすなる麺」を確立されるまでは大変なご苦労があったことと思います。授産の製品」と思われるのではなく、「本格的なうどん」と思われるように、皆さんがモチベーションを高く持たれていました。皆さんのうどん作りに対する情熱が伝わり、その想いが味にも出た結果、金賞受賞に繋がっているのだと思いました。

私も家で早速あすなる麺を湯がきいただきました。喉ごしが良く、コシがあつてモチモチとし、非常に美味しかったです。

本日はお忙しい中、施設長さんをはじめ、職員の方々、利用者の方々に暖かく迎えていただき、無事取材を終えることが出来ました。「あすなる」の皆様、ありがとうございました。

# 平成23年度卓球バレー大会報告

実行委員長：小倉 智憲 (京都市ふしみ学園)



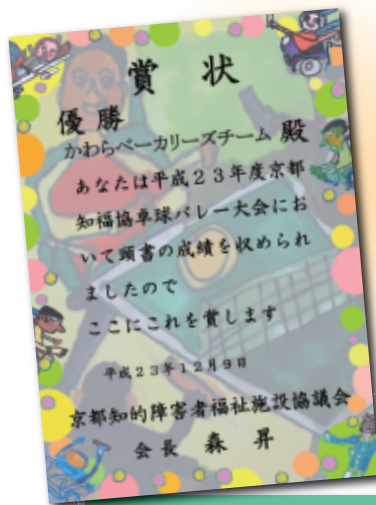
昨年12月9日(金)に京都知福協主催卓球バレー大会が京都市障害者スポーツセンターにて開催されました。例年この時期の北山方面はかなり寒いのですが、当日は少し寒さも和らぎ木漏れ日もみられる穏やかな日となりました。

試合は2つのブロックに分かれて予選リーグを行い、続いて決勝トーナメント方式での戦いとなりました。

今年度は6施設6チーム、52名のこじんまりとした大会となりましたが、みなさん優勝を手にする為に白熱したプレーを繰り広げたり、また珍プレーでの笑い声や悔しがる声など、例年以上に大盛り上がりで楽しく卓球バレーに参加していました。

年々チーム数が少なくなってきましたが、この大会の為に練習を積み重ね、その成果を思う存分発揮されているみなさんの姿をみて、来年度も開催できる事を願っています。

終了後、みなさんに「また来年もお会いしましょうね」と言うと、元気よく「はい」や「また



来年」と返事を頂いたり、「来年はなんとか3位に入りたい」という職員さんの声を聞いたりと、みなさん笑顔で帰路について行かれました。

開催にあたり、事故もなく無事に大会を終える事が出来たのも、卓球バレー協会の審判員の皆さま、並びに関係各位の皆さまのご協力の御蔭です。

主催者同、感謝しお礼を申し上げます。ありがとうございます。

## 試合結果

- 優勝 かわらべーカリーズチーム (みずなぎ鹿原学園)
- 準優勝 へっぴりーズチーム (みずなぎ学園)
- 3位 みずなぎ丸田学園チーム (みずなぎ丸田学園)

# シリーズ こんなことやっています 第1回 京・であい市

社会福祉法人菊鉾会 テンダーハウス  
主任 成実 憲一

「東日本大震災で被災された障害者施設の復興支援をおこないたい！」  
「地域の障害者施設との交流の場を作りたい！」

その様な思いから、昨年10月23日(日)「京・であい市」を開催いたしました。

この企画が始動したのは、祇園祭が終わった昨年7月下旬。10月におこなわれる時代祭にあわせ、東北と京都の授産製品を販売するイベントを、巡行ルートである三条通りに面したホテル・日昇館尚心亭の駐車場で開催する準備を始めました。

参加施設は、当施設の近隣の施設を中心に全8施設。また東北の授産製品は、東日本大震災関西西障害者応援連絡会様から協力を頂きました。そしてイベント名は、たくさんの方々の「であい」の場にしていきたいというコンセプトにより、「京・であい市」と命名しました。

ところで、15年前の阪神淡路大震災の際、兵庫県の障害者支援施設「芦屋翠ホーム」の方々の避難先として、日昇館尚心亭(当時ホテルニュー日昇)が東別館を提供されました。この出会いにより、東別館を福祉施設として活用したいという思いが生

まれ、テンダーハウスは誕生したのです。阪神大震災をきっかけに生まれたテンダーハウスが、東日本大震災の復興支援をする…。不思議な繋がりを感じながら、この「京・であい市」を進めていきました。開催当日、22日に予定されていた時代祭が10年ぶりの順延となり、「京・であい市」も同じく順延となったため、大変ご迷惑をおかけしました。そんな中でも、多くの方々に来場して頂き、お客様、そして地域の方々、施設の方々とたくさん「であい」が生まれたイベントになりました。会場では、陶芸のワークショップ(豆皿の絵付け)もおこないました。これがきっかけで、昨年12月に近隣のだん王児童館様でもこのワークショップをおこなうことができました。

一期一会、そして人と人との輪が広がっていく。これからも「京・であい市」をそのような場にしていきたいと思います。



▲京・であい市の様子



## なすな学園

開催はあいにくの悪天候で順延となりましたが、観光客の方や、出展施設の利用者さん、家族さん、スタッフの方などに足をお運びいただくことが出来ました。また、商品を通してお話を伺いする中で、直接お客様から商品のアドバイスや感想をお伺いすることも出来、貴重な機会をいただいたと感謝しております。商品を通して人と人の「であい」が増えることを喜びに、これからもメンバーと一緒に楽しい商品を制作していきたいと思ひます。

## 共同作業所 サリュ

目の前でゆったりと時代祭をみることができ、また、雰囲気も全体的にゆったりとした空気が流れていて出展する側も楽しむことができました。また、豆皿の絵付け体験は、子供たちも簡単にできる楽しい体験であったと思います。ただ、来場者が少なかったことは残念ではありますが、もし、来年も企画があるようでしたら、次年度の課題として、如何に集客を目指すのか、共に考えることができれば、と思ひます。ありがとうございました。

## 大照学園授産部

テンダーハウスさんの御好意で御案内して下さり、とても有難く参加させていただきました。事前現地説明会や、沢山の案内チラシの準備、そして京都三大祭りの時代祭に合わせて、沿道の大勢の人達、とても華やかな中での出店。今後も時代祭との、なお一層のコラボレーションが出来るように、次回開催も切に願ひ、是非とも参加したい。出店に当たり、御配慮、お気遣い下さったスタッフの方々へ厚く御礼申し上げます。

## 修光学園・HOLYLAND

“連携”や“つながり”は大切で、その必要性は誰もがわかっています。そして、「みんなが集まれば素晴らしいことができるのに」といろいろな想像をすることも少なくありません。しかし、そんな夢や思いを形にするためにはクリアすべき困難が多く、実現に向けた第一歩を踏み出せないことが多いと思ひます。そのような中で、今回のような「であい」の場を形にされ、実現されたことは素晴らしいことだと思ひます。

## 京都ライトハウス FSTモニー

「三条通り沿いの広いスペースで、しかも時代祭の日に自主製品の販売ができるなんて、なんて嬉しいことなのだろう!」と当日を待ちわびていました。当日は朝からたくさんのお客様が見に来られ「障害のある方が一つひとつ手作業で作っているんです」と商品が出来る過程を説明しながら販売ができました。お客さんとのコミュニケーションをとりながら、商品に対する意見も聞けたのでとても良い勉強になりました。温かい出会いがたくさん京・であい市となりました。

## NPO法人さまざま 楽々堂

時代祭りの当日で観光客の方も多く、賑わっていました。東北の授産製品の販売コーナーでは、障害者の方々も笑顔で大きな声で楽しく販売をされていました。陶器の絵付け体験コーナーに参加させてもらったり、焼きたての美味しいパンを食べたり、とても楽しく販売も出来ました。子供さんから大人まで、色々な方たちと出会えた1日でしたが、他施設の方たちともっと積極的に交流できたらよかったです後悔もしました。

## 編集後記

「京都愛護」に参加させていただいてから数十年。あまりの年月に啞然としながらも職場以外の若い人の姿に刺激をもらいながら「知福協だより」の編集に参加させていただいています。かつては「ポリシヨイサーカス」や「運動会」に利用者と一緒に参加したものです。まさに時の流れの速さを感じます。今、それぞれの職場でもこの間に措置から契約、支援費制度から自立支援法、そして今「障害者総合支援法」へと変わろうとしています。「当たり前」の暮らし、「生活の質」と目指した支援についてたくさんの人と議論を繰り返してきました。時代の流れの中で利用者の生活は人権、プライバシーの尊重、ニーズに基づいた支援計画の作成、実施と職場での議論もより科学的に専門的に質的に変換してきています。何十年前も前の支援を振り返ると、人として愛おしく思う気持ちは溢れていたものの「無知」であったがゆえに行っていた支援に申し訳なさつと怖さを実感しています。今回示された「障害者総合支援法」では障害の有無を問わず人として可能な限り身近な地域で必要な支援を受けることができるように、このことで社会的障壁の除去ができるようになるとうたわれています。今も地域でも職場でも「無知」から来る虐待などを聞くにつけ、多くの障壁が未だに立ちふさがっているのを感じます。

身近な地域での支援がどこまで実現できるかは、一番身近で利用者を支援している私たちにかかっています。

今、障害のある利用者に関わっている私たちは、人として尊び愛おしむ事を基本的に科学的な知識や専門性を身につけ、自分たちで変えることができる物を変える努力と変えられない物を受け入れる勇気とそれらを見極める力をつけていきたいと思います。

(花ノ木医療福祉センター/杉山とよの)